作物の批評

夏目漱石

中学には中学の課目があり、高等学校には高等学校の課目があって、これを修了せねば卒業の資格はないとしてある。その課目の数やその按排（あんばい）の順は皆文部省が制定するのだから各担任の教師は委託をうけたる学問をその時間の範囲内において出来得る限りの力を尽すべきが至当と云わねばならぬ。

しかるに各課担任の教師はその学問の専門家であるがため、専門以外の部門に無識にして無頓着（むとんじゃく）なるがため、自己研究の題目と他人教授の課業との権衡（けんこう）を見るの明なきがため、往々（おうおう）わが範囲以外に飛び超（こ）えて、わが学問の有効を、他の領域内に侵入してまでも主張し

ようとする事がある。たとえば英語の教師が英語に熱心なるのあまり学生を鞭撻して、地理数学の研修に利用すべき当然の時間を割いてまでも難句集を暗誦させるようなものである。ただにそれのみではない、わが専攻する課目のほか、わが担任する授業のほかには天下又一の力を用いるに足るものなきを吹聴し来るのである。吹聴し来るだけならまだいい。はてはあらゆる他の課目を罵倒し去るのである。

かかる行動に出ずる人の中で、相当の論拠があって公然文部省所定の課目に服せぬものはここに引き合に出す限りではない。それほどの見識のある人ならば結

構である。四角に仕切った芝居小屋の枡（ます）みたような時間割のなかに立て籠（こも）って、土竜（もぐら）のごとく働いている教師より遥（はる）かに結構である。しかし英語だけの本城に生涯（しょうがい）の尻を落ちつけるのみならず、櫓（やぐら）から首を出して天下の形勢を視察するほどの能力さえなきものが、いたずらに自尊の念と固陋（ころう）の見（けん）を綯（よ）り合せたるごとき没分暁（ぼつぶんぎょう）の鞭（むち）を振って学生を精根のつづく限りたたいたなら、見じめなのは学生である。熱心は敬服すべきである。精神は嘉（よみ）すべきである。その善意的なるもまた多とすべきである。あるにもかかわらず学生は迷惑である。当該課目における智識が欠乏するためではな

い、当該課目以外の智識が全然欠乏しているからである。ただ欠乏しているからではない。その結果としていらぬところまでのさばり出て、要もない課目を打ちのめさねばやまぬていの勇気があるから迷惑なのである。

これらの人は自己の主張を守るの点において志士である。主張を貫かんとするの点において勇士である。主張の長所を認むるの点において智者である。他意なく人のために尽さんとするの点において善人である。ただ自他の関係を知らず、眼を全局に注ぐ能わざるがため、わが縄張り（なわば）りを設けて、いい加減なところに幅を

利かして満足すべきところを、足に任せて天下を横行して、憚からぬのが災になる。人が咎めれば云う。おれの地面と君の地面との境はどこだ。境は自分がきめぬだけで、人の方ではとうから定めている。再び咎めれば云う。この通り足が達者でどこへでも歩いて行かれるじゃないか。足の達者なのは御意の通りである。足に任せて人の畠を荒らされては困ると云うのである。かの志士と云い、勇士と云い、智者と云い、善人と云われたるものもここにおいてかたちまちに浪人となり、暴士となり、盲者となり、悪人となる。

今の評家のあるものは、ある点においてこの教師に

似ていると思う。もっとも尊敬すべき言語をもって評家を翻訳すれば教師である。もっとも謙遜（けんそん）したる意義において作家を解釈すれば生徒である。生徒の点数は教師によって定まる。生徒の父兄朋友（ほうゆう）といえどもこの権利をいかんともする事はできん。学業の成績（せいせき）は一に教師の判断に任せて、不平をさしはさまざるのみならず、かえってこれによって彼らの優劣を定めんとしつつある。一般の世間が評家に望むところは正にこれにほかならぬ。

ただ学校の教師には専門がある。担任がある。評家はここまで発達しておらぬ。たまには詩のみ評するも

の、劇のみ品するものもあるが、しかしそれすら寥々（りょうりょう）たるものである。のみならずこれらの分類は形式に属する分類であるから、専門として独立する価値があるかないかすでに疑問である。して見ると、つまりは純文学の批評家は純文学の方面に関するあらゆる創作を検閲して採点しつつある事になる。前例を布衍（ふえん）して云うと地理、数学、物理、歴史、語学の試験をただ一人で担任すると同様な結果になる。

　純文学と云えばはなはだ単簡（たんかん）である。しかしその内容を論ずれば千差万別である。実は文学の標榜（ひょうぼう）するところは何と何でその表現し得る題目はいかなる範囲

に跨がって、その人を動かす点は幾カ条あって、これらが未来の開化に触るるときどこまで押拡げ得るものであるか、いまだ何人も組織的に研究したものがおらんのである。またすこぶるできにくいのである。

こう云うては分らんかも知らぬ。例を挙げて二三を語ればすぐに合点が行く。古い話であるが昔しの人は劇の三統一と云う事を必要条件のように説いた。ところが沙翁の劇はこれを破っている。しかも立派にできている。してみると統一が劇の必要であると云う趣味から沙翁の作物を見れば失望するにきまっている。あるいは駄作になるかも知れぬ。しかしこれがために統

一論の価値がなくなったのではない。その価値がモジフハイされたのであると思う。だからこの条件を充(み)たした劇を見ればやはりそれなりに面白い。その代り沙翁の劇を賞翫(しょうがん)する態度でかかってはならぬ。読者の方で融通を利(き)かして、その作物と同じ平面に立つだけの余裕がなくてはならぬ。ほかに一例をあげる。また沙翁を引合に出すが、あの男のかいたものはすごぶる乱暴な所がある。劇の一段(シーン)がたった五六行で、始まるかと思うとすぐしまわねばならぬと思うのに、作者は大胆にも平気でいくらでも、こんな連鎖を設けている。無論マクベスの発端のように行数は短かくても、興味

の上において全篇を貫く重みのあるものは論外であるが、平々凡々たるしかも十行内外の一段を設けるのは、話しの続きをあらわすためやむをえず挿入（そうにゅう）したのだと見え透（す）くように思われる。換言すれば彼の戯曲のあるものは齣幕の組織において明かに比例を失している。だから比例だけを眼中に置いてマーチャント・オブ・ヴェニスを読むものは必ず失敗の作だと云うだろう。マーチャント・オブ・ヴェニスはこの点から読むべきものでないと云う事がわかる。また沙翁を引き合に出す。オセロは四大悲劇の一である。しかし読んでけっして好い感じの起るものではない。不愉快である。

（今はその理由を説明する余地がないから略す）もし感じ一方をもってあの作に対すれば全然愚作である。幸にしてオセロは事件の綜合（そうごう）と人格の発展が非常にうまく配合されて自然と悲劇に運び去る手際（てぎわ）がある。読者はそれを見ればいい。日本の芝居の仕組は支離滅裂である。馬鹿馬鹿しい。結構とか性格とか云う点からあれを見たならば抱腹するのが多いだろう。しかし幕に変化がある。出来事が走馬灯（そうまとう）のごとく人を驚かして続々出る。ここだけを面白がって、そのほかを忘れておればやはり幾分の興味がある。一九は御覧の通りの作者である。一九を読んで崇高の感がないと云うのは

非難しようもない。崇高の感がないから排斥すべしと云うのは、文学と崇高の感と内容において全部一致した暁でなければ云えぬ事である。一九に点を与えるときには滑稽（こっけい）が下卑（げひ）であるから五十とか、諧謔（かいぎゃく）が自然だから九十とかきめなければならぬ。メリメのカルメンはカルメンと云う女性を描（えが）いて躍然たらしめている。あれを読んで人生問題の根元に触れていないから駄作だと云うのは数学の先生が英語の答案を見て方程式にあてはまらないから落第だと云うようなものである。デフォーは一種の写実家である。ロビンソンクルーソーを読んでテニソンのイノック・アーデンのように

詩趣がないと云う。ここまではなるほどと降参せねばならぬ。しかしそれだからロビンソンクルーソーは作物にならないと云うのは歌麿の風俗画には美人があるが、ギド・レニのマグダレンは女になっておらんと主張するようなものである。——例を挙（あ）げれば際限がないからやめる。

　作家が評家に呈出する答案はかくのごとく多種多面である。評家は中学の教師のごとく部門をわけて採点するかまたは一人で物理、数学、地理、歴史の智識を兼ねなければならぬ。今の評家は後者である。いやしくも評家であって、専門の分岐（ぶんき）せぬ今の世に立つから

には、多様の作家が呈出する答案を検閲するときにあたって、いろいろに立場を易(か)えて、作家の精神を汲(く)まねばならぬ。融通のきかぬ一本調子の趣味に固執(こしゅう)して、その趣味以外の作物を一気に抹殺(まっさつ)せんとするのは、英語の教師が物理、化学、歴史を受け持ちながら、すべての答案を英語の尺度で採点してしまうと一般である。その尺度に合せざる作家はことごとく落第の悲運に際会せざるを得ない。世間は学校の採点を信ずるごとく、評家を信ずるの極(きょく)ついにその落第を当然と認定するに至るだろう。

ここにおいて評家の責任が起る。評家はまず世間と

作家とに向って文学はいかなる者ぞと云う解決を与えねばならん。文学上の述作を批判するにあたって（詩は詩、劇は劇、小説は小説、すべてに共有なる点は共有なる点として）批判すべき条項を明かに備えねばならぬ。あたかも中学及び高等学校の規定が何と何と、これこれとを修め得ざるものは学生にあらずと宣告するがごとくせねばならん。この条項を備えたる評家はこの条項中のあるものについて百より○に至るまでの点数を作家に附与せねばならん。この条項のうちわが趣味の欠乏して自己に答案を検査するの資格なしと思惟（しい）するときは作家と世間とに遠慮して点数を付与す

る事を差(さ)し控(ひか)えねばならん。評家は自己の得意なる趣味において専門教師と同等の権力を有するを得べきも、その縄張(なわばり)以外の諸点においては知らぬ、わからぬと云い切るか、または何事をも云わぬが礼であり、徳義である。

　これらの条項を机の上に貼(は)り附(つ)けるのは、学校の教師が、学校の課目全体を承知の上で、自己の受持に当るようなもので、自他の関係を明かにして、文学の全体を一目に見渡すと同時に、自己の立脚地を知るの便宜(べんぎ)になる。今の評家はこの便宜を認めていない。認めても作っていない。ただ手当り次第にやる。述作に

対すると思いついた事をいい加減に述べる。だから評し尽したのだか、まだ残っているのか当人にも判然しない。西洋も日本も同じ事である。

これらの条項を遺憾（いかん）なく揃（そろ）えるためには過去の文学を材料とせねばならぬ。過去の批評を一括（いっかつ）してその変遷を知らねばならぬ。したがって上下数千年に渉（わた）って抽象的の工夫（くふう）を費やさねばならぬ。右から見ている人と左から眺めている人との関係を同じ平面にあつめて比較せねばならぬ。昔（むか）しの人の述作した精神と、今の人の支配を受くる潮流とを地図のように指（ゆびさ）し示さねばならぬ。要するに一人の事業ではない。一日の事業

でもない。

この条項を備えたる人にして始めて、この条項中に差等をつける事を考えてもよいと思う。人力も人を載せる。電車も人も載せる。両者を知ったものが始めて両者の利害長短を比較するの権利を享ける。中学の課目は数においてきまっている。時間の多少は一様ではない。必要の度の高い英語のごときは比較的多くの時間を占領している。批評の条項についても諸人の合意でこれらの高下を定める事ができるかも知れぬ。(できぬかも知れぬ)崇高感を第一位に置くもよい。純美感を第一にするもよい。あるいは人間の機微に触れた

内部の消息を伝えた作品を第一位に据えてもいい。あるいは平々淡々のうちに人を引き着ける垢抜けのした著述を推すもいい。猛烈なものでも、沈静なものでも、形式の整ったものでも、放縦にしてまとまらぬうちに面白味のあるものでも、精緻を極めたものでも、一気に呵成したものでも、神秘的なものでも、写実的なものでも、朧のなかに影を認めるような模糊たるものでも、青天白日の下に掌をさすがごとき明瞭なものでもいい――。相当の理由があって第一位に置かんとならば、相当の理由があって等差を附するならば差支ない。ただしできるかできぬかは疑問である。

これらの条項に差等をつけると同時にこれらの条項中のあるものは性質において併立（へいりつ）して存在すべきも、甲乙を従属せしむべきものでないと云う事に気がつくかも知れぬ。しかもその併立せるものが一見反対の趣味で相容（あいい）れぬと云う事実も認め得るかも知れぬ――批評家は反対の趣味も同時に胸裏（きょうり）に蓄える必要がある。

　物理学者が物質を材料とするごとく、動物学者が動物を材料とするごとく、批評家もまた過去の文学を材料として以上の条項とこの条項に従て起る趣味の法則を得ねばならぬ。されどもこの条項とこの法則とは過去の材料より得たる事実を忘れてはならぬ。したがっ

て古(ふるき)に拘泥(こうでい)してあらゆる未来の作物にこれらを応用して得たりと思うは誤りである。死したる自然は古今来(ここんらい)を通じて同一である。活動せる人間精神の発現は版行(はんこう)で押したようには行かぬ。過去の文学は未来の文学を生む。生まれたものは同じ訳には行かぬ。同じ訳に行かぬものを、同じ法則で品隲(ひんしつ)せんとするのは舟を刻んで剣を求むるの類(たぐい)である。過去を綜合(そうごう)して得たる法則は批評家の参考で、批評家の尺度ではない。尺度は伸縮自在にして常に彼の胸中に存在せねばならぬ。批評の法則が立つと文学が衰えるとはこのためである。法則がわるいのではない。法則を利用する評家

が変通の理を解せんのである。

作家は造物主である。造物主である以上は評家の予期するものばかりは拵(こし)らえぬ。突然として破天荒(はてんこう)の作物を天降(あまくだ)らせて評家の脳を奪う事がある。中学の課目は文部省できめてある。課目以外の答案を出して採点を求める生徒は一人もない。したがって教師は融通が利(き)かなくてもよい。造物主は白い烏(からす)を一夜に作るかも知れぬ。動物学者は白い烏を見た以上は烏は黒いものなりとの定義を変ずる必要を認めねばならぬごとく、批評家もまた古来の法則に遵(したが)わざる、また過去の作中より挙(あ)げ尽したる評価的条項以外の条項を有する文

辞に接せぬとは限らぬ。これに接したるとき、白い烏を烏と認むるほどの、見識と勇気と説明がなくてはならぬ。これができるためには以上の条項と法則を知れねばならぬ。知って融通の才を利（き）かさねばならぬ。拘泥（こうでい）すればそれまでである。

　現代評家の弊（へい）はこの条項とこの法則を知らざるにある。ある人は煩悶（はんもん）を描（えが）かねば文学でないと云う。あるものは他にいかほどの採（と）るべき点があっても、事件に少しでも不自然があれば文学でないと云う。あるものは人間交渉の際卒然として起る際（きわ）どき真味がなければ文学でないと云う。あるものは平淡なる写生文に事件

の発展がないのを見て文学でないと云う。しかして評家が従来の読書及び先輩の薫陶、もしくは自己の狭隘なる経験より出でたる一縷の細長き趣味中に含まるるもののみを見て真の文学だ、真の文学だと云う。余はこれを不快に思う。

　余は評家ではない。前段に述べたる資格を有する評家では無論ない。したがって評家としての余の位地を高めんがためにこの篇を草したのではない。時間の許す限り世の評家と共に過去を研究して、出来得る限りこの根拠地を作りたいと思う。思うについては自分一人でやるより広く天下の人と共にやる方がわが文界の

慶事であるから云うのである。今の評家はかほどの事を知らぬ訳ではあるまいから、御互にこう云う了見（りょうけん）で過去を研究して、御互に得た結果を交換して自然と吾邦（わがくに）将来の批評の土台を築いたらよかろうと相談をするのである。実は西洋でもさほど進歩しておらんと思う。

余は今日までに多少の創作をした。この創作が世間に解せられずして不平だからこの言をなすのでないのは無論である。余の作物は余の予期以上に歓迎されておる。たといある人々から種々の注文が出ても、その注文者の立場は余によくわかっておる。したがってこ

れらの人に対して不平はなおさらない。だから余の云う事は自己の作物のためでない事は明かである。余はただ吾邦未来の文運のために云うのである。

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房
１９８８（昭和63）年７月26日第１刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年４月～１９７２（昭和47）年１月
入力：柴田卓治
校正：大野晋
１９９９年９月15日公開
２００４年２月26日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。